アロンの子牛

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24612

「アロンの子牛」

キリスト教学科長　原口尚彰

出エジプト記、三二章一～六節　新共同訳を一部訂正

―モーセが山からなかなか下りてこないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、

『さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです』と言うと、2アロンは彼らに言った。『あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。』3民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。4彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鋳像を造った。すると彼らは、『これこそあなたをエジプトの国から導き上がったあなたの神（神々）だ』と言った。5アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、『明日、主の祭りを行う』と宣言した。6彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。

今日の聖書の箇所は有名なアロンの子牛の話です。イスラエルの民はモーセに率いられて隷属の地であるエジプトを脱出してから、シナイ半島の荒野を四〇年間彷徨った後に、約束の地であるカ

ナン、現在のイスラエルの地に入りました。荒野の旅の途上で彼らがシナイ山の麓まで来た時、モーセだけが山上へ招かれて登り、そこに四〇日四〇夜の間留まって十戒を神から授かるという、イスラエルにとって画期的な出来事が起こりました。今日のエピソードはその時に起こった一つの逸脱事件です。モーセがシナイ山上に留まったのは四〇日四〇夜でしたが（出エジプト記二四・一二―一八）、この時間が余りに長いので、民が不安になり、指導者を失ったと思い、自分たちの先頭に立って導く神の像を造って欲しいとモーセの兄弟のアロンに頼んだのがことの始まりです（三二・一）。

アロンはこともあろうに民に身に付けていた金の耳輪を外させ、それを鋳て子牛を作ってやりました（三二・二―四前半）。実は、イスラエルやシリアからは発掘調査により、当時の周辺世界の諸民族が奉じていたバアル宗教の祭壇に用いられた牛の象が見つかっています。バアルとはカナンの神々の最高神であり、天空を支配し気象を司る神とされています。牛の上に見えない姿でバアルが鎮座しているというのが基本的なイメージです。アロンの意図も同様で、天地を創った神、父祖アブラハム・イサク・ヤコブの神、イスラエルを奴隷の地であるエジプトの地から導き出した神は見えざる神であり、子牛の上に見えない形で臨在するということだったと思います。しかし、民衆は見えざる神ということでは不安になり、目に見える神を欲して、目に見える子牛の象そのものを神として拝んだようです（三二・四）。彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国か

ら導き上ったあなたの神（新共同訳では「神々」）だ」と言いました。

これは勿論、刻んだ象を作り、拝んではならないというモーセの十戒の第二戒に違反する行為ですが、見えない唯一の神のみを神として他のものは一切神としてはならないという信仰が大衆レベルではなかなか難しいということを示しています。同じ事は、後の王国時代になり、北王国の創始者ヤラボアムが、北王国の人々の巡礼のためにダンとベテルの国家聖所の祭壇に金の子牛を置いた出来事が示しています（列王記上一二・二八―三三）。目に見えない神の存在を信じて拝むよりは、目に見えるものを拝む方が人間にはずっと楽だからです。

さて、アロンは子牛の前に祭壇を築き、そこで祭儀を行って犠牲を捧げました。聖書は、「民は座って飲み食いし、立っては戯れた」と伝えています。これは、子牛の祭壇の前で祭りを行い、そこで祝いの食事がなされ、民が歌舞音曲を捧げたということでしょう。色々な宗教には神々に捧げる華やかな祭りを行うものがあります。例えば、日本では神社にまつわる祭りが多くあります。祭りは神々に捧げる神事であり、神聖なものですが、それを支える地域共同体の人々にとっては、大きな喜びと集団的な高揚を与えるものです。人々は祭りの時には高揚した気分の中で、日常の生活の単調さや辛さを忘れることが出来ますし、集団の一体感を味わうことが出来ます。アロンの子牛の前で大騒ぎしたイスラエルの民の心境も同じ事で、行けども行けども続く荒野の中を苦労して旅する労苦や窮乏を一時的に忘れ、祭りの雰囲気に酔ったことだと思います。しかし、民の騒ぎはシ

ナイ山上のモーセの耳に達し、怒ったモーセは急遽山を下りて、民の騒ぎを鎮め、アロンの子牛を破壊し、強く叱りつけ、処罰をしました。イスラエルの宗教は人の手で作った象を祭壇に安置して拝み、祭りすることによって成り立っているのではなく、見えざる神が父祖アブラハムに語った契約の言葉や、モーセを通して民をエジプトから導き出した歴史的事実や、十戒を通して示された神の意思を毎日の生活の中で守ることにありました。つまり、イスラエルの宗教は非常に倫理的な宗教であることに特色がありました。祭りによる一時的な気分の高揚を与えるよりも、人生の指針を与える律法を学び実践することに価値を置いたのでありました。

新約聖書のヨハネによる福音書の初めの方に、「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」と書かれています（ヨハネ一・一七）。旧約聖書における神は、律法を厳格に守ることを要求し、非常に厳しい印象が強いのですが、新約聖書はこの神が同時にイエス・キリストの父であり、愛と恵みの神、罪を赦す神であることを告げています。よく親の愛情を受けたことがない者は、人を愛することが出来ないと言います。これは逆に、愛情を受けて育った者は人を愛することが出来るということです。まして、天の父である神は、私たちの一人一人に愛情を注いでいます。ヨハネによる福音書の三章一六節は、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで。永遠の命を得るためである。」と語ります。私たちは神によって愛と自由を与えられた者として、キリストに倣っ

て神と人を愛し、喜んで神と人に仕える者でありたいと思います。